かゑらじと　かねて思へハ　梓弓

なき数に入る　名をぞとどむる

四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信　第 26 号

平成 28 年 5 月 10 日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021　四條畷市南野 5 丁目 2 番 16 号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

武士に針仕事も必要！一本に貫く道、それは誠心

四恩の教えも含めて、龍覚坊に学んだ正行

今月のテーマ　正行の受けた教育

楠正行の受けた教育とは、いったいどのような内容だったのでしょうか。

武人として生きたというよりも、一人の人間として、己が正しいと信じる『義』の道、ただ一筋に生き、天皇への忠と、親への孝を全うし、年若くして潔く散って逝った正行。正行の人生を繙けば繙くほど、魅力が増すばかりです。

四條畷、郷土ゆかりの人物、正行。誇れる人、正行はいったいどのような教育を受けたのか、今月のテーマです。

死にして生、生にして死　死生一生

正成・正行の師は、観心寺の僧、龍覚坊です。

観心寺の名誉住職、永島龍弘氏は、観心寺発行「高野山真言宗遺跡本山　観心寺」の中で、“正成は少年期を当寺で過ごし、師の龍覚より”四恩（国・親・衆生・三宝の恩）”の教えの大切さを学んだことが、後年、彼の行動の基盤になっている“、と記されています。

龍覚坊については、楠正行通信 10 号で取り上げましたので、生い立ち等はそちらをご覧ください。

ここでは、久留島武彦著「忠魂と士魂　大楠公と恩師龍覚坊」から、幼・少年期の正成に対して、どのような教えをしたのか、取り上げてみましょう。

龍覚坊は、「袴をたたむことはおろか、針仕事もできなければならぬ。」と教えます。

正成は袴を上手にたためなかったようです。この時、龍覚坊は、「上手にたためなくとも良い。が、一通り正しいたたみかたはできなくてはならぬ。武士は、いついかなる場所に身を置いても、困らぬ用意が必要なのだ。針仕事も、立派な武士になる学問。」と、教えます。

正成が、「霜が冷たい。」といった時、次のように教えました。

冷たいものを冷たいというは自然のこと。苦労辛苦はかってでもすべし。天に雪霜なくば、青松も草に若かず。地に山川なくば、人、なんぞ平地を尊ばん。願わくば天に雪霜の多からんことを、願わくば地に山川の繁らんことを。

雪や霜の降らぬうちは、松も草も一様に青い。だが一度雪霜に遭えば、草は枯れ、松ばかり青々と残り、松の尊さが表れる。山や川があればこそ、人は平地のありがたさを知ることができるのだ、と。

大将に認められるためには、との問いに、正成は、立派な武士を手本にその行動をまねる、と応えます。

この時、龍覚坊は、人に仕える途とは、人によって違い、場合によっては変わらなければならない。が、そこに一本貫く道がある。それは『誠心』だ、と。

功名を求めず、利達を願わず、困難に屈せず、誘惑に惑わされず、ただ己の誠心の命ずるままに節義を尽くすこと、是が真の大丈夫の道だ。

また、湊川の戦を前に、正成の気持ちは揺れ動いたようです。勅命とはいえ、主上のためにならない結果を招くとしたらどうするべきか、と。

この時も龍覚坊は一刀両断です。

臣道は万代を貫く一本の道だ。臣道を貫くためならば、生きるもよし、死するもよい。臣道が正成一人の死によって絶えるとでも思っているのか。後に続く者があることを忘れているのではないか。

臣道の大義を貫くためには、死も死にあらず、生も生に非ず、死にして生、生にして死、死生一生じゃ。ご聖運は、天壌無窮（肉体は必ず亡滅してゆく約束のものであり、心はこれと正反対に、天壌無窮を約束された永遠なる生命に所属するもの）じゃ、と。

忠孝両全、まさに四恩の教え

正成、正行の生きざまを見ますと、その随所に四恩の教えを感じさせてくれます。

高野山天台宗・密門会の講話集「四恩の徳を報ずる」（織田隆深）から、四恩の教えについて学びました。

まずは、**「父母の恩」**です。

我々を生み育ててくれるのは父母の恩であり、それは大空よりもはるか高く、大地よりもなお厚い、と。

正行が生涯を通じて全うした「忠孝両全」の生き方に父母の恩を見て取ることができます。

次に、**「国王の恩」**です。

父母が我々を生んでくれたとしても、国に王がいなかったら、強者弱者互いに戦い、貴者貧者互いに奪い合って、この身の命は到底保ちがたく、その財宝を守るすべとてない、と。

正成も、正行も、その正統たる帝、後醍醐天皇・後村上天皇に尽くすことになりますが、当時の朱子学が唱えた大義名分論の影響が多分に大きかったものと思われます。

三つ目は、**「衆生の恩」**です。

我々は無始より以来、あらゆる生きとし生けるものが生死を繰り返す業苦の世界において、互いに因縁を結んで父となり、子となる。我々は、これなくして、生を受けることなく、世界にこの身を著わすことはないのである。一切の生きとし生けるものは、すべてわが身の親というべきものである。だからこそ、経典には、「すべての男子はわが父、すべての女人はわが母、すべて生あるものはわが両親、師匠、君主である」と。

正成は、千早の戦いで散って逝った者たちのために供養塔を立てました。その際、敵（幕府軍）と呼ばず寄せ手とし、その五輪塔を味方（楠軍）の塔よりも大きく立てています。

寄手塚　身方塚

また、正行は、住吉天王寺の戦いで、川におぼれる敵兵を救い、手当てを施し、衣類を与えて返します。正成の寄手塚、正行の渡辺橋の美談、四恩の教えを感じずにはいられません。

最後は、**「三宝の恩」**です。

生死の苦しみを抜き、悟りの楽を与えてくれるのは三宝の恩である。三宝の功徳こそ人知を超えて神秘なものである、と。

その三宝とは、仏宝、法宝、僧宝を言います。

正成も正行も大変信仰心が篤かった、と思われます。

正成は、建武新政の無事を祈って三重塔を建立しようとしますが、湊川の戦の為成らず、初重にして止みました。現在も、観心寺境内に、建て掛けの塔と称し、残っています。

正行は、弘法大師が勧請した観心寺の鎮守、訶梨帝母天堂が焼失した際、後村上天皇の命を受け、修復をしています。

大義名分論の源泉＝宋学の影響

歴史を鑑としてみる正統論

そして、最後に、正成、正行が学んだと思われる宋学のルーツをたどりました。

宋学のルーツは、歴史を鑑としてみる中国にある国家的風土と言えるのではないでしょうか。

孔子は、春秋時代の魯国の記録＝年代記を編年体で**「春秋」**に著しますが、後に、儒教の経典として考えられるようになります。

司馬遷が著した**「史記」**は、中国古代の歴史を、帝王や著名な人物ごとにその歴史を著わす紀伝体で編まれています。

そして、宋時代に入ると、司馬光の**「資治通鑑」**が登場します。

紀元前４世紀から五代後周（959）に終わる、実に、1362 年に及ぶ編年体の通史で、皇帝による封建政治をより強固にするために編まれたといわれています。

資治通鑑は、「国家の盛衰に関わり、国民の幸福に連なり、法とすべき善、戒めとすべき悪を専ら取り上げて編年体の書物をつくり、前後に条理を保ち、精粗を混ぜ合わさないようにする」と、司馬光自身が表明しています。

資治通鑑の簡略化を目指して編まれたのが、朱熹（朱子）の**「資治通鑑綱目」**です。

凡例のトップにくる「正統例」、正統とは何か、周・秦・漢・隋・唐の五朝、しかも天下統一を果たした時点からを言います。

写真（「千早赤阪村の文化遺産」文化遺産活用地域活性化実行員会編より）は、千早赤阪村の森屋惣墓に立つ 2 基の大型石造五輪塔、寄手塚・身方塚です。

総高は、寄手塚が 182 センチ、身方塚が 137.3 センチと、大きさがかなり違います。

（文責「四條畷楠正行の会」代表　扇谷昭）